



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語樺太方言における数詞と計算
Author(s)	阪口, 諒; Sakaguchi, Ryo
Citation	北方人文研究, 15, 63-84
Issue Date	2022-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84608
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_05_Sakaguchi.pdf



アイヌ語樺太方言における数詞と計算*

阪口 諒

(千葉大学人文公共学府／日本学術振興会特別研究員)

要旨

本稿は、19世紀後半から20世紀後半にかけて記録された Dobrotvorskij (1875)、山邊 (1913)、Laufer (1917)、Naert (1961)、服部編 (1964) を対象として、樺太方言の数表現について考察するものである。以上の資料から、10～19 までは wanpe を基底数とした表現で固定されていること、kunkutu 「十」、tanku 「百」、wantanku 「千」という十進法の基底数が用いられていることが確認できる。年代的に古く、情報量の多い『アイヌ語ロシア語辞典』(Dobrotvorskij 1875)には二十進法による数詞および計算も数多く見られる。この資料には、基底数として hoh 「20」、(sine)wano 「200」、way(sine)wano 「2,000」が確認できる。本稿で用いたどの資料でも 10,000 もしくは 20,000 を表す基底数は確認できないが、限られた基底数と係数(数連体詞)、足す数を組み合わせることで、基底数のない 10,000 もしくは 20,000 以上の数を表現することが可能である。『アイヌ語ロシア語辞典』では、20,000 以上の数も、way(sine)wano 「2,000」を含む数名詞(句)にそれを修飾する数連体詞を付加するか、数名詞(句)を並べる乗法を用いるかにより表現されている(山邊 1913にも数連体詞を用いた hohne wantanku 「二万」と、数名詞を並べた re kunkutu wantanku 「三万」という例がある)。

はじめに

本稿の目的は、19世紀後半から1960年代までに記録された樺太方言¹⁾における数の仕組みを明らかにすることである²⁾。アイヌ語はかつてはどの方言でも二十進法であったとされる(ただし、20

* 本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号 20J11234)による成果の一部である。本稿の執筆にあたっては匿名の査読者の方からの有益なご指摘をいただいた。深く感謝申し上げる。ただし、本稿における不備や分析の誤りは筆者の責任に帰するものである。

1) 本テキストにおける音韻表記は服部編(1964: 34)に従う。母音音素は5つ(a, i, u, e, o)、子音音素は11個(p, t, k, c, s, r, m, n, w, y, h, ')である。必要がないかぎり、声門閉鎖音/ʼ/は省略する。

2) 本稿の目的はアイヌ祖語における数詞体系の再建にあるわけではない。また6～9が10と1～5との合成であるかなど、アイヌ語数詞の研究でしばしばみられる点に関しては触れないことにしたい。ただ、tupesan 「8の」、sinepesan 「9の」がtup-e-san (=wan)、sinep-e-san (=wan) というような形態素分析が可能だと筆者は考えない(末尾のsanが数連体詞のwanだとするの音韻変化が説明できず、またそれが正しいと仮定しても、e-sanの前節要素がwanと同じく数連体詞sine, tu [sinep, tupはこれからの派生]でないことは理解しにくい)。数え上げに用いる8、9はtupes, sinepesであり(沙流: 田村 1988: 84; 静内: 小野 1997: 221)、形態素の境界はsinepes/tupesとan (wan?)の間にあると考える方

以上の数に限る)。樺太方言を視野に入れたアイヌ語数詞の研究はかなりの蓄積があるものの、分析が数詞の形成法を求めるものに偏っていたり、用いているデータの質にばらつきがみられる。樺太方言の例として主に取り上げられているのは、服部編(1964)中のライチシカ方言であるが、樺太内部での地域差、年代差にも注意を払う必要がある。また、数詞を組み合わせた複合的な表現についても明らかにする必要がある。アイヌ語が用いられる社会に生まれ育った人にとって、6~9が10と1~5との合成であるかなどは、実際の運用において問題とならない³⁾。しかし、基本数詞を組み合わせて大きな数を表示する必要があると、その表現方法が問題となってくる。本稿では、そうした基本数詞の組み合わせの仕組みを明らかにしようとする。まず、北海道、樺太、千島の各方言の数詞を扱った村崎(2008, 2009)⁴⁾と同様に、先行研究に見られる数詞を整理する。次に、Laufer(1917)、金田一(1913)、服部編(1964)、Naert(1961)を中心に数の表現方法を明らかにする。その後、山邊(1913)の本文とDobrotvorskij(1875)でどういった数表現が用いられるのか、そして、そうした表現がどのような仕組みで形成されているのかに関して考察する。

1. 本稿で用いる用語

本稿で用いる用語を Yasugi(1995)を参考に設定する(対応する日本語は八杉1990を参考にした)。数詞は原則として基本数(D: digit)と基底数(B: base number)の組み合わせからなる。最小の位を構成する数が基本数で1~9である(アイヌ語のどの方言でも10以上20未満は十進法である)。基底数は位ということになる。日本語の漢数字の場合、係数(C: coefficient)と足す数は、基本数が基底数の前に置かれるか、後に置かれるかによって区別される(例: ni-juu「20」、juu-ni「12」)。アイヌ語の数詞では、基底数に対して、足す数(数名詞)と係数(数連体詞)の区別が形態的に明確であるため(次節参照)、十の位の端数(任意の基底数に注目した余剰の数)となっている数名詞のみを足す数(=基本数(D))として扱うことにし、数連体詞は係数(C)として記述する。基底数が10倍ごとに変わる場合を十進法と呼び、20倍ごとに変わる場合を二十進法と呼ぶことにする。十進法であれば20、30、二十進法であれば20、40のような区切りの良い数をラウンドナンバー(round number)とし、隣り合うラウンドナンバーの間の数を中間数(interval numbers)とする。

2. アイヌ語の数詞

アイヌ語において、数詞は、数名詞と数連体詞と数え上げ数詞(間投詞)の総称である。数名詞は、日本語の「ひとつ、ふたつ、みっつ」に当たるもので、数連体詞は「ひとつの、ふたつの、みっつの」に当たるものである。20を表す hot(~h)や、樺太で用いられる基底数 kunkutu「十」、tanku「百」といった語を除いて、形態上、数名詞は数連体詞から派生したものである(これら、数連体詞から派生して数名詞となるものを基本数詞とする)。そのため、訳において、数連体詞は sine「1倍の」、tu「2倍の」のように表示し、数名詞は sineh「1」、tuh「2」とする。tu hoh であれば「2

が良いのではないだろうか。

3) 北海道静内における1990年代の調査でも、sinep と sinepes に何か関係があるのでは?との調査者の質問に話者が否定的に答えたものがある(小野1997: 222)。

4) 村崎(2009)は、村崎(2008)に樺太方言に見られる基底数 kunkutu、tanku の説明が加わったのみで、内容はほぼ同一である。以下、本稿では kunkutu、tanku の訳語をそれぞれ十、百とする。それは、他の基本数詞と異なり、そのままの形で数名詞として用いられるという性質の違いがあるためである。

倍の・20」とし、「 2×20 」とは表示しない。それは、「数連体詞・数名詞」（つまり、数名詞句）と「数名詞（句）・数名詞（句）」とは仕組みの異なる表現であり、正確な意味の把握において両者を区別することが重要であるためである（両者を混同すると表される数に誤りが生じる）。どちらも数式に置き換えることはできるものの、数名詞（句）連続タイプのみを「数名詞（句） \times 数名詞（句）」方式で表示することにする。数連体詞のうち tu「2 倍の」、re「3 倍の」は、非自立の接合形式と考えられているが（服部 1961：7）、便宜上、分かち書きをする。

アイヌ語では 20 以上の数において、hot を基準とする二十進法が広く用いられていたと推測されるが、樺太や北海道北東部（旭川、宗谷）においては十進法が発達している（村崎 2008、2009；落合 2021 など）。樺太方言に関していえば、隣人のウイльтаやサンタン交易に従事するサンタン人（大部分が現代のウルチャにつながる）を通じて借用されたツングース系言語に由来する語彙が確認される。基底数 tanku「百」は、アイヌによれば「山丹語」から入ったのだとも（金田一 1913：17）、オルチャ（Olthy）からクロテン用の罌の数え方⁵⁾として取り入れたのだともされる（Piłsudski 1912: 141）。意味の類似する同様の語は満洲語やアムール川下流・沿海州のツングース諸語、ウイльта語、ニヅフ語にもあるが、サンタン人との交易を通じて直接アイヌ語に入ったとも考えられる（池上 1990/2004：275）⁶⁾。なお、十を表す kunkutu に似た例は満洲語、ニヅフ語、ウイльта語、ウルチャ（オルチャ）語に見当たらない⁷⁾。数詞に関して具体的に見る前に、その研究史を概観しておきたい。

3. 樺太方言の数詞に関する研究史

すでに村崎（2008、2009）で、アイヌ語の数詞に関する先行文献に触れられているが、ここではそこで触れられていない文献を含めて、数詞の記述を時代順に概観する（説明は樺太方言に関する部分のみを取り上げる）。おそらく樺太方言の数詞に関する最も古い記録はラペルーズ（Jean-François de Galaup, comte de Lapérouse, 1741-1788?）によるものである。ラペルーズは 1787 年にラングル湾（久春内湾）⁸⁾周辺で数詞 24 語を含めた 161 語を採集している（ラペルーズ 1988：x-xvi）。

5) これは Dobrotvorskij (1875：317、附録 81) に、クロテンを獲るための 100 本の縄（縄とは kaa のことで、罌をも指す）を tanku という、とあるのを参考しているのかもしれない。Dobrotvorskij (1875) では tanku、kunkutu とともにクロテンに関係する語彙としてのみ記述されている。

6) Laufer (1917：196) が同様のことを指摘し、支配者たる満洲人から取り入れたのだとしている。村山 (1970/1971：118) も、tanku は「満洲語 tanggū」（に由来する）との補足を付け、浅井 (1982：78) は tanku がウイльта語から借用されたものとしている。津曲 (2009：4) は、満洲語 tanggū がウイльта語等を経て、アイヌ語樺太方言とニヅフ語に広まったものと推測している。

7) 風間仲次郎氏も「山丹語」とされるウルチャ語（オルチャ語、ウリチ語とも称される）に kunkutu に相当する語彙を見いだせないと指摘している（落合 2021：註 19）。村崎 (2009：76) は「kunkutu がカムチャダール語経由で流入」したとするが、その根拠は全く記されていない。『蝦夷方言藻汐草』（上原 1792/1969：坤五十七丁）には、鶯（の羽）の「粕尾」（オジロワシの幼鳥の尾羽か）としてククツ（kunkutu）が、「薄氷」（薄氷：オジロワシの成鳥の尾羽か）としてテタルククツ（t(～r)etar kunkutu「白い kunkutu」）が掲載されている。山本 (1981：89) にも「～羽」にたいする「ククテ」が挙げられるが、これらが kunkutu と関わる可能性を筆者は考えている（鶯の羽、テンの毛皮のどちらも重要な交易品である点が共通する）。kunkutu は、tanku のように（近い過去に）借用された語彙ではなく、古くからある語彙で、交易に伴って数詞として用いられるようになったものなのかもしれない。

8) ラングル湾（baie de Langle）は北緯 47 度 49 分、東経 140 度 29 分に位置し、日本領時代の久春内泊地〔註一現 Il'inskoe 内〕付近に相当する（ラペルーズ 1988：248 註 12）。村崎 (2008：181；2009：74) でラペルーズの語彙採集地を「Tchoka（オチホ、落帆?）」としているが、ラングル湾（久春内湾）の誤りで

このときに記録された数詞が（ピジン的なものではなく）真正なアイヌ語であるかは不明である。ラベルーズの語彙は、後にフィッツマイヤー（August Pfizmaier, 1808-1887）がその批判検討を行っているほか（Pfizmaier 1850）、ナール（Pierre Naert, 1916-1971）もフィッツマイヤーの研究とは別個に、第二次世界大戦後北海道へ移住した樺太方言話者3名の協力を得て、この語彙の批判的検討を行っている（Naert 1961）。日本の蝦夷通詞上原熊次郎による、収録語数2740語を擁する『藻汐草』（上原1792/1969）も後の研究に大きな影響を与えているが、数詞に関しては、このすぐ後のダヴィドフの語彙集と同じく、真正なアイヌ語であると思えない特徴的な語形が散見される⁹⁾。1805年に宗谷、サハリンのアニワ湾で調査を行ったラングスドルフ（Georg Heinrich von Langsdorff, 1774-1852）らによる「アイヌ諸部族間で話される言語の見本」（Langsdorff 1812）に掲載の数詞もまた真正なアイヌ語らしからぬ特徴がみられる¹⁰⁾。ダヴィドフ（Gavriil Ivanovich Davydov, 1784-1809）の「サハリン半島南端に住む民族の言語の語彙集」（Davydov 1812）は、1806～7年のクシュンコタン（現 Korsakov）遠征を契機に作成された語彙集とされ、1987の語彙を含む。前述のフィッツマイヤーの研究など、ヨーロッパのアイヌ語研究においてよく参照されているものの、殊に数詞に関しては、日本語と併記されていること、アイヌ語の表記も日本語話者による発音である印象を受けることから¹¹⁾、本稿では検討の対象としない（その分析は今後の課題としたい）。

日露雑居期（日露共同領有期）中の1867～72年には、ロシアの軍医であるドブロトヴォルスキー（Mikhail Mikhajlovich Dobrotvorskij, 1836-1874）が、おそらくクスンナイ／久春内（現 Il'inskoe）を中心にアイヌ語を記録し、上述のラベルーズ、ラングスドルフ、ダヴィドフによる収集語彙のほか、『藻汐草』からも語彙を収集した。その集大成が辞典として出版された（Dobrotvorskij 1875）¹²⁾。同時代のルダノフスキー（Nikolaj Vasil'evich Rudanovskij, 1819-1882）の記録にも数詞の記載があるが、あまり正確な記述とは思えないうえ、「どうやらアイヌは、計算に体系的な手法を有しておらず、10までしか持っていないようだ」（Latyshev 1991: 123、拙訳）とさえ述べている。

ある。現地の住民が自分たちが暮らす島を Tchoka と呼んだとあるが、本来は一人称代名詞の cioka (y)～cooka(y)で、ラベルーズはそれを島の名前として記録したのだと思われる（Naert 1961: 332 はライチカ方言話者から cookay ではないかとの示唆を受けている）。

9) 註11参照。

10) 例えば、1,000を表す数詞として aschikinischine wano choz [asikini sinewano hots]とあるが、asik(～s) ne sinewanot(～h)が期待される。イェッソ [=北海道]のアイヌ (Ainu aus Jesso)の言語の例として wanak「10」が記載されているが、この語は近代以前の文献に多く現れる（wanakに関しては中川1988参照）。

11) 閉音節を開音節で発音していることからそう考えられる。すでにドブロトヴォルスキーがこの語彙集に関して日本人によって歪められた発音に従っていると指摘している（Dobrotvorskij 1875: 22；ドブロトヴォルスキー1995: 55）。また、数詞が真正なアイヌ語とは思えず、『藻汐草』と非常に類似していることから（例えば、200はそれぞれ Shnevano hots、シ子ワ子ホツである [sinewanot(～h)が期待される]）、日本語話者との間で用いられる「アイヌ語」数詞が記録されているのではないと思われる。Siebold (1858: 120)も、この語彙集が日本人によって作成された可能性が極めて高いとし、Schrenk (1881: 256 註7) [=Schrenk (1883: 267 註2)]もそれに賛同している。

12) Dobrotvorskij (1875)に含まれている数詞は、魚井・廣田(2004)に列挙され、計算式への置き換えや語源分解など施されているが、『藻汐草』、ダヴィドフの語彙集など他文献から引用された数詞を含めて提示しているため、非常に使いづらい。また、Dobrotvorskij (1875: 32)の akhsam eine kunkutu「クロテン (sobol') 35匹」を「akhsam'e ine kunkutu 犬35匹」（魚井・廣田2004: 6）とするなど、ロシア語の解釈にも疑問点がある（犬は sobaka）。

その後、1875年に樺太千島交換条約（サンクトペテルブルク条約）によってサハリン全島がロシア領となる。1887年以来、サハリン島に流刑になっていたポーランド人ピウスツキ（Bronisław Piłsudski, 1866-1918）は、1902～4年にかけて、アイヌ語を集中的に調査している。ピウスツキのまとめた民話集には数詞に関する記述が若干含まれている（Piłsudski 1912）。1898～99年にはドイツ生まれのアメリカの言語学者ラウファー（Berthold Laufer, 1874-1934）がジェサップ探検隊としてサハリンとアムール川河口一帯でフィールドワークを行うが、東海岸の樺太アイヌの言語文化に関する調査も行い、後にアイヌ語の数詞に関する調査結果を発表している（Laufer 1917）。

1905年に、日露戦争の結果として、南サハリンが日本領樺太となると、この後の調査記録の中心は日本人の手によって行われたものとなる。1907年には金田一京助が落帆、富内でアイヌ語を調査し、その結果が金田一（1913）などにまとめられている。その後、知里真志保による数詞、特に数連体詞の研究がなされている（知里 1941）。

その後、日本の敗戦に伴い、樺太アイヌのほぼ全員が北海道以南に「引揚げ」るが、移住先の北海道で樺太方言の調査が行われている。特に服部四郎によって1955年以降に行われたライチシカ方言の調査は詳細である。前述のナールは、1959年に北海道の常呂町でライチシカ（服部のインフォーマントと同一人物）、タラントマリ（多蘭泊）¹³⁾、ナイロ（内路）出身の話者に当たってラベルズ採集語彙の確認を行っている（Naert 1961）。Peng & Brainerd (1970) は、主に服部編（1964）をもとにして、南サハリン北西部のライチシカ方言と北海道南部の沙流方言の数詞を対象にその生成に関わる規則を追及している。その後、村崎恭子によって千島方言、樺太方言、北海道方言のそれぞれの数詞の特徴をまとめた報告が提出され（村崎 2008, 2009）、近年では、落合（2021）がアイヌ語の諸方言を対象に、二十進法における undercounting 「下方算法」から overcounting 「上方算法」への切り替え¹⁴⁾について検討しているほか、地域差を考慮する必要があることを認めつつ、樺太方言1（金田一 1913）のデータが記録された1910年代から、樺太方言2（服部編 1964）のデータが記録された1960年代の間に、二十進法から十進法への変化が起きたと主張している¹⁵⁾。

先行研究の問題点

これまで、樺太方言を視野に入れたアイヌ語数詞の研究はかなりの蓄積があるものの、データの

13) Ohnuki-Tierney (1968: 50-51) によれば、この話者は北海道の対雁生まれで、後に家族とともに南サハリンの大泊、そして多蘭泊へ移住したという。村崎（1976: 6）には、両親とも真岡のアイヌで（本人の出生地は書かれていない）、引揚げまで真岡郡タラントマリに住んでいたとある。大貫恵美子、村崎恭子、更科源蔵らの調査にも協力している（更科 1963; Ohnuki-Tierney 1968; 村崎 1976）。

14) 20～40の間の数詞を例にすれば、中間数 [=「端数」(落合 2021)] の前半、すなわち 21～29 は undercounting (29であれば、隣り合う 20 の倍数のうち小さい方の 20 を基準に「20あまり9」と表現する方式) を使用し、30～39 (中間数の後半) は overcounting (30であれば隣り合う 20 の倍数のうち、大きい方の 40 を基準に「10が40に向かっている」と表現する方式) を使用すると主張している (中間数を前半と後半に分け、前半は undercounting、後半では overcounting に切り替えるとしている)。そして、先行研究で統一的に扱われてこなかった中間数の後半の 10 数詞を「11が40に向かっている」(31の場合) のように解釈することで、30～39 を同一の方式で扱えるとしている。なお、undercounting、overcounting は、Menninger (1969) の用語で、八杉 (1990) では「下位起算法」、「上位起算 (加) 法」とある。

15) 落合 (2021: 106) は註 20 において、借用語の kunkutu 「十」や tanku 「百」を用いるかどうかは、地域差があったようだとの北原モコットウナシ氏の指摘を紹介している。

質にばらつきがみられる。近年の研究においても、樺太方言の例として主に取り上げられているのは、服部編(1964)中のライチシカ方言である。また、落合(2021)は樺太方言のデータとして、樺太方言1(金田一1913)と、樺太方言2(服部編1964)のライチシカ方言を用いているが、1のデータの典拠である金田一(1913)は、山邊(1913)の附録という位置づけであるものの、その記述は山邊(1913)のアイヌ語本文と必ずしも一致していない。そのため、金田一(1913)の記述(二十進法の形式の他に、樺太方言2のデータに相当する十進法の形式も代替形式として挙げている)に依拠して、二十進法から十進法への変化の具体的な年代を主張するのは無理があるように思われる¹⁶⁾。山邊(1913)の本文にはむしろ hoh「20」を用いた表現は限定的にしか見られず、kunkutu「十」、tanku「百」を用いた表現が圧倒的に多い(5.4で後述)。また、しばしばライチシカ方言が樺太方言の代表として扱われるが、歴史的な背景として、西海岸北部(いわゆるウシヨロ場所)は、幕末に至ってもなおサンタン人との交易が続いていた地域であり(東2010)、南サハリンの他の地点と数の表現が異なる可能性を考慮する必要がある¹⁷⁾。

4. 樺太方言の数詞1から19まで

まずは、より大きな数を表すうえで基礎となる20より小さい数に関する記述を見ていく。これまでナールによる樺太方言の語彙調査記録を含む「実地検証したラベルズのアイン語語彙」(Naert 1961)は日本で参照された形跡がないが、数詞に関して樺太内の3地点を比較できる資料であり、重要な文献と言える(服部・知里1960は地点こそ多いが、1～5までの数詞しか掲載されていない)。このほか、ラウファー、金田一京助の記録を用いる。Laufer(1917)は、1899年1月のサハリン島南東海岸¹⁸⁾における調査に基づくもので、当時、一般的に普及していた数え方を一覧にして報告している。また、金田一(1913)は、1907年の東海岸南部の落帆、富内での調査に基づくものと思われる。Laufer(1917)と金田一(1913)には機械的に組み合わせたと見える箇所もあるが、参考に掲載する。なお、先行研究でも最も参照され、記述の信頼性の高い服部編(1964)のライチシカ方言は、Naert(1961)のライチシカ方言と同じ話者からの聞き取りであるため、Naert(1961)と記述が重なる場合は、Naert(1961)で代表させた。Naert(1961)、Laufer(1917)、金田一(1913)に掲載のある1～12までの数名詞は以下の表1の通りである(表記は本稿の方式に統一した)。

16) 1899年のラウファー調査時には十進法が二十進法とともに広く用いられている(Laufer 1917: 195)。

17) 樺太方言として参照されるのはライチシカ方言が多く、ライチシカ方言が事実上、樺太方言の代表となっている。そのため、数詞に限らず、ライチシカ方言が樺太のアイヌ語としてどのような特徴を有するのか、他の方言とどれほど共通性があるのか、今後、より詳細に調査する必要があるだろう。

18) サハリン島の南東海岸であり、南サハリンの南東部ではない。ラウファーの調査地点はシスカ Siska(敷香)、ナヨロ Naiero(内路)～ナイブチ Naibuchi(内淵)に至る集落であり、ナヨロが最も成果を上げた場所である(Laufer 1899)。

表1. アイヌ語樺太方言の数名詞1~12 (方角は南サハリンでのおおよその位置を示す)

	南西	北西	北東	北東	南東
	タラントマリ	ライチシカ	ナイロ	Laufer (1917)	金田一 (1913)
1	sinep	sineh	sinep	sine	sineh
2	tup	tuh	tup	tuu	tuh
3	rep	reh	rep	ree	reh
4	inep [iinep]	ineh [iineh]	inep [iinep]	iine	iineh
5	asnep	asneh	asisne	asik, asisne	asisneh
6	iwanpe	iwanpe	iwanpe	iwan, iwanpe	iwanpe
7	arawanpe	arawanpe	arawanpe	aruwanpe	arawanpe
8	tupesanpe	tupesanpe	tupesanpe	tupesanpe	tupesanpe
9	sinepisanpe	sinepisanpe	sinepisanpe	sinepesanpe	sinepesanpe
10	wanpe	wanpe	wanpe	wanpe	wanpe
11	sinep ikasma wanpe	sineh ikasma wanpe	sinep ikasma wanpe	記載なし	sineh ikasma wanpe
12	tup ikasma wanpe	tuh ikasma wanpe	tup ikasma wanpe	記載なし	tuh ikasma wanpe

1 から 10 の数詞に関しては、音節末の子音の差異を除いて、語形に共通性が高い (Laufer 1917 の記録は数名詞を記録したものか、数連体詞もしくは間投詞を記録したものか不明な箇所がある)。ナールは、ラベルズ採集語彙では、音節末の h (ch と表記される) が記録されているが、ランゲル湾 (久春内湾) と最も近い地域の西海岸南部タラントマリの話者の発音が、時折ラベルズの語彙記録と異なり、音節末の -p をはっきりと発音していると指摘している (Naert 1961: 352)¹⁹⁾。ナイロでも音節末の -p が発音されている。

村崎 (2008: 181; 2009: 74) は、樺太方言の数詞の特徴として、5 を意味する語形が、(北海道方言形から想定される asisneh ではなく) 子音クラスターを嫌って k が抜けて asneh となっていると指摘するが、これは東海岸には当てはまらないようである (Dobrotvorskij 1875 では asisneh が用いられている)。同じく村崎 (2008: 181; 2009: 74) で指摘される、北海道方言で見られる音節末の -p 「もの」が樺太方言では -h になるという点は、タラントマリ、ナイロには当てはまらないことも確認できる²⁰⁾。

11~19 は、基底数 (B) wanpe 「10」を基準とした端数 (= 基本数 D) は ikasma を付して表される。11, 12 は「1・余る (ikasma)・10」、「2・余る (ikasma)・10」というような、 $D \text{ ikasma } B^1$ ($B^1 = \text{wanpe}$) という形式 (十進法でいう 1 の位を先に言う形式) がいずれの記録においても確認でき (このタイプは Laufer 1917 に記載がない)、地域に関係なく固定した表現であることが伺える。より年

19) これはすでに服部・知里 (1960) のタラントマリのインフォーマントの発音からも確認されることである。音韻の Variant から樺太方言の区分をも行っていた鬼春人氏は、音節末の子音に関してタライカ方言と真岡より多蘭泊に至る海岸線で話される方言との間の、音節末に -h が現れない [筆者註—実際には -h は現れうと思われる] という共通性を指摘している (鬼 1959: 64)。服部 (1976: Ⅲ) では、なぜかタラントマリが言及されず「北海道方言の音節末の -p, -t, -k がカラフト諸方言で (タライカ方言を除き) 尽く -h (i の後では、ふつうの文体的レベルで -s) となっている」と述べられている。そのほか、村崎 (1976) 中の「マオカ方言」話者の音声からも時折、音節末の -p, -k が確認される。タラントマリの話者の何名かに調査を行っているにもかかわらず、知里 (1942: 171) は、タライカに関してのみ音節末の -p, -t, -k が保存されていると述べる。

20) ライチシカ方言に関しては、村崎 (2009) の指摘が当てはまると思われるが、村崎 (2008) は、自らが教えを受けた方としてタラントマリの話者 (Naert 1961 のインフォーマントと同一人物) を挙げているにもかかわらず、タラントマリを全く考慮に入れていないようである。

代の遡る Dobrotvorskij (1875) でも、sine[h] ikasma wanpe 「11」 (p. 305)、tu[h] ikasma wampe 「12」 (p. 334) という同様の表現が用いられている (以下、[] 内は原典で表記されないが、筆者が補ったもの)。wanpe を基底数とする全ての例で、端数は ikasma に前置されるという構造を持つ。

5. 樺太方言における 20 以上の数

表2は、表1と同じく、Naert (1961)、Laufer (1917)、金田一 (1913) に掲載のある 10~50 までの数名詞を列挙し、対照したものである。ライチシカ方言の 20 に関しては、服部編 (1964) から補った。

表2. アイヌ語樺太方言の数名詞 10~100

	南西	北西	北東	北東	南東
	タラントマリ	ライチシカ	ナイロ	Laufer (1917)	金田一 (1913)
10	wanpe	wanpe	wanpe	wanpe	wanpe
20	tu kunkutu	tu kunkutu / hohne (服部編 1964)	tu kunkutu	tuu kunkutu	tu kunkutu
30	re kunkutu	re kunkutu / wanpe ikasma sine hoh (古風な表現)	re kunkutu	ree kunkutu	wan etuhoh / re kunkutu
40	私のインフォーマントたち (mes informateurs) は ine kunkutu [iine kunkutu] と言った。			iine kunkutu	iine kunkutu
50				asisne kunkutu	wan erehoh
100	私のインフォーマントたち (mes informateurs) は sine tanku と言った。				

5.1 hoh 「20」と kunkutu 「十」

10を表す数詞が全て wanpe であるのに対し、10の倍数である 20 とそれより大きい 10 の倍数では kunkutu が基底数として用いられることが多い。金田一 (1913) で示された 30、50 のように、wan[pe] etuhoh、wan[pe] erehoh²¹⁾ というような、hoh 「20」の倍数に、接頭辞 e- を付加して 30、50 を表現する方式 (落合 2021 は overcounting と指摘: 註 14 参照) は、20 世紀後半の調査で確認できない。ナールの調査においては、30 を表すのに、タラントマリおよびナイロの話者は kunkutu を用いた表現を知るのみで hoh を用いた表現を知らないのに対し、ライチシカの話者は kunkutu を用いた表現とともに、より「古風な archaïque」表現²²⁾として wanpe ikasma sine hoh 「10・余る・1 倍の・20」という表現をあげている (Naert 1961: 350)。この wanpe ikasma sine hoh という形式は、ikasma を用いた下位起算法 (undercounting) となっている点で、Dobrotvorskij (1875: 44)

21) 20 以上の数詞において、金田一 (1913) では、数連体詞、数名詞に相当する区別はなされていない。金田一 (1913: 15-16) で提示されている「アイヌ固有の数詞法」は、北海道方言との対照のために、金田一が北海道方言の知識で以って機械的に作り出したものではないかとの印象を受ける。違和感のある語形が (30 が wanpe etuhoh、50 が wanpe erehoh でない) 実例に基づくのかは定かではない。本稿の 5.4 で述べるように、山邊 (1913) では、こうした「アイヌ固有の数詞法」はほとんど確認できない。

22) 年長者によって用られる onne-itah 「年寄言葉」のことであろう。服部 (1957) に示されるとおり、「年寄言葉」と北海道方言とが一致する例がかなりあるが、「年寄言葉」に外来語が取り入れられている場合があるなど、「年寄言葉」が古形で、sukup-itah 「若言葉」が改新形だと言えるわけではない。

に見られるような wanpe etuho[h]「30」を「10 が 40 (2 倍の・20) に向かう」で表す上位起算加法 (overcounting) と差異が見られる。むしろライチシカ方言は「古風」と認識する形式ですら、接頭辞 e-を用いた形式ではない点で、Dobrotvorskij (1875) と共通性が低く、下位起算法を基にした「新しい」数詞体系である可能性がある²³⁾。hoh の山邊 (1913) での用いられ方は、5.4 で扱うことにする。

5.2 wanpe「10」とkunkutu「十」

10 を表すのに sine kunkutu「1 倍の・十」が用いられず、wanpe が用いられることは、村崎 (2008: 181; 2009: 74) の指摘と一致するが²⁴⁾、1~10 を数え上げる場合と、10 の倍数を述べていくような場合とで異なるという可能性を考える必要がある (日本語でも数え上げる場合には「とお」を用いることがあるが、十の倍数を数えるときには「じゅう、にじゅう…」を用いる)。Naert (1961: 350) に wanpe ikasma sine hoh「30 (10・余る・1 倍の・20)」が確認できるので、少なくともライチシカにおいて、hoh が基底数の場合、端数の 10 は wanpe であり、sine kunkutu「1 倍の・十」とは表されないようである。hoh を用いた二十進法の場合にはアイヌ語本来の wanpe「10」が保たれているようである。なお、基底数 kunkutu「十」を用いる場合、端数はあっても、基本数 (D) 1~9 に限定されるため、wanpe「10」は端数となりえない。

10 から 19 の場合 (第 4 節で見たのは 12 までだが)、wanpe「10」が基底数の十進法であり、20 以上の数において、十進法の場合、kunkutu「十」が基底数として用いられていると言える。

5.3 kunkutu「十」とtanku「百」

表 3 から確認されるように、kunkutu を基底数 (B) とした表現 (20~90) が、ここで取り上げたいずれの報告からも確認できる。Naert (1961) では、30 より大きい数が記録されていないので、kunkutu の用いられ方を見るため、その他の先行研究での記述を確認する。前述のように、10 と 20 の表示に関して、kunkutu を用いるか否かが異なっているので、表 3 では、服部編 (1964) に掲載されている 10~3000 までの数に合わせる形で、Laufer (1917)、金田一 (1913) の数詞を列挙する。表中に〔老〕とあるのは「年寄言葉」のことである (註 22 参照)。

表 2、3 にある通り、20~90 の間の 10 の倍数には kunkutu「十」が基底数として用いられ、100 以上の数には tanku「百」が基底数として用いられている (金田一 1913 では 10 にも kunkutu が基底数として用いられている)。kunkutu、tanku いずれの場合も、係数 (C) にはアイヌ語固有の数連体詞が用いられている (C は基本数 D で 1~9)。なお、1000 の倍数は tanku「百」から派生した

23) この構造は、金田一の 20 世紀初頭の記録からも確認される。金田一 (1913: 16) は 100 以上の数において、wan ikashma asishne-hoh「110」(10・余る・100)などを提示しているほか、金田一 (1935: 263) は、樺太アイヌの間で wan ikashma hot「30」、wan ikashma tu-hot「50」、wan ikashma re-hot「70」、wan ikashma ine-hot「90」(以上、表記はママ)を開いたことがあるとする(北海道では全く遭遇しなかったという)。

24) Dobrotvorskij (1875: 153) に kunkutu もしくは sine kunkutu が「10 匹のクロテン」を表す語として掲載されている (金田一 (1913: 17) にも sine kunkutu (十) が掲載)。これは例えば、210 (tu tanku sine kunkutu か) というような場合の端数の「10」をドブトロヴォルスキーが抜き出したものかもしれない。なお、北海道沙流方言を中心に収録した萱野 (1996: 268) に「シネクンクド」が「100」として掲載されている。

表3. アイヌ語樺太方言の数名詞 10~3000

	服部編 (1964)	Laufer (1917)	金田一 (1913)
10	wanpe	wanpe	sine kunkutu / wanpe
20	tu kunkutu, hohne [老]	tuu kunkutu	tu kunkutu / hoh(ne)
30	re kunkutu / wanpe ikasma sine hoh (Naert 1961)	ree kunkutu	re kunkutu / wan erehoh
40	iine kunkutu	iine kunkutu	iine kunkutu / tu hoh
50	asne kunkutu	asisne kunkutu	(asisne kunkutu) / wan erehoh
60	iwan kunkutu	iwan kunkutu	iwan kunkutu / re hoh
70	arawan kunkutu	aruwan kunkutu	arawan kunkutu / wan eiinehoh
80	tupesan kunkutu	tupesan kunkutu	tupesan kunkutu
90	sinepisan kunkutu	sinepisan kunkutu	sinepisan kunkutu/wan easisnehoh
100	sine tanku	sine tanku	sine tanku / asisne hoh
110	sine tanku orowa wanpe (ikasma)	記載なし	wan ikasma asisnehoh
120	sine tanku orowa tu kunkutu ikasma	記載なし	hoh ikasma asisnehoh
130	sine tanku orowa re kunkutu ikasma	記載なし	wan etuhoh ikasma asisnehoh
200	tu tanku	tuu tanku	記載なし
300	re tanku	ree tanku	記載なし
1,000	sine wantanku	wantanku	記載なし
2,000	tu wantanku	記載なし	hoh tanku
3,000	re wantanku	記載なし	記載なし

wantanku「千(=10の百)」が基底数で、sine wantanku「1倍の・千」、2000はtu wantanku「2倍の・千」、3000はre wantanku「3倍の・千」と表現され、十進法であることが確認できる²⁵⁾。100台、1,000台、10,000台の場合は、係数としてsine「1倍の」が付加されることがある。

ラウファーは、kunkutu、tankuを用いた十進法を一覧にして報告しているものの、ドプロトヴォルスキーとピウスツキが述べているように、サハリンでも二十進法がいまだに支配的であることは間違いないとし(ただし、ラウファーは二十進法の実例を掲載していない)、アイヌ語でもアイヌを取り巻くどの民族の言語でも、kunkutuが「10匹のクロテン」(Dobrotvorskij 1875: 153)という意味の言葉でないことは確かである、としている(Laufer 1917: 195)。tankuについてもDobrotvorskij (1875: 317)は、「クロテンを捕まえるための100個の罟」²⁶⁾を意味すると述べているが、tankuは単に「100」を意味するとする(Laufer 1917: 196)。ドプロトヴォルスキーの記述は、文脈を取り除いた形での意味ではなく、具体的な場面での意味のみが記述されていることも多い。そのため、kunkutuがクロテンそのものを指すという解釈や、tankuがクロテンの罟のみを数えるという解釈を取ることはできない可能性がある²⁷⁾。なお、ピウスツキは、民話に出てくるtankuへ

25) 小泉文夫、米村喜男衛が1967年に行った聞き取り(甲地2001: 79-80)でも、樺太東海岸小田寒出身者が1000をwantanku、2000をtu wantankuと述べている(査読者の方にこの資料の存在をご教示頂いた)。

26) 寺田・安田訳では、sine tanku、tu tankuという用例の説明を「(あるいは10本の縄、20本の縄)」(ドプロトヴォルスキー2016: 71)とするが、「縄」と訳されているopispeは「クロテン捕獲用の10本の縄」のことで(Dobrotvorskij 1875: 46, 228, 付録81)、tankuは「10のopispe、20のopispe」と解釈すべきである。

27) kunkutuがクロテンを取引する場面において用いられることが多いという傾向はあるかもしれない。なお、ドプロトヴォルスキーが主な活動拠点としていたクスンナイ(久春内)では、アイヌと和人漁業者

の註として、tanku はオルチャ (Olthy) から取り入れた言葉で、アイヌは彼らからクロテン (pine-marten) に罾を仕掛けることを学び、その言葉で罾の数を百で数えたと記述する²⁸⁾ (Pitsudski 1912: 141)。

20 世紀に入ってから、樺太方言では二十進法 (の痕跡) は確認できるものの、Naert (1961) に見られるように、樺太各地で基底数の kunkutu 「十」、tanku 「百」を用いる十進法に取って代わられていったと見て良いだろう。

5.4 アイヌ語テキストに見る kunkutu 「十」と hoh 「20」

いずれの記録からも、20~90 台までの基底数として kunkutu (~o) が確認できるが、実際のアイヌ語テキストでそれらがどのように用いられているか確認したい。そこで、樺太アイヌ自身が近代の生活をアイヌ語で語った山邊 (1913) の本文 (以下、『物語』) を用いて確認を行う。tu kunkutu 「2 倍の・十」を用いた表現が 16 例出現するのに対し、本文全てに目を通して、hoh 「20」及び hohne 「20 倍の」を用いた表現は 6 例しか確認できない。hoh が基底数となったもの (例 1~3) と、係数 hohne が用いられているもの (例 4、5) がある。

- (1) メイヂ、 イワン パー、 イカシマ、 ホツネ、 パー、 ネー、 パー、 ケヘ
Meiji iwan paa ikasma hohne paa nee paakehe
 明治 6 倍の 年 余る 20 倍の 年 である 年 (長形)
 「明治二十六年」(『物語』5)
- (2) アルワン パー、 イカシマ、 ツ ホツ パー
aruwan paa ikasma tu hoh paa
 7 倍の 年 余る 2 倍の 20 年
 「二十七歳²⁹⁾」(『物語』72)
- (3) ヘン、 パハノ、 ホツホ
hempahno hoh
 いくつの 20
 「何十人何百人」(『物語』137)
- (4) ホホネ、 トー
hohne too
 20 倍の 日
 「二十日」(『物語』48、107)

との交流が日常的に行われていたため、和人との間で用いられるリング・フランカとしての「アイヌ語」の数詞 (『藻汐草』、ダヴィドフの語彙に見られるような数詞) が存在するために、この地域では十進法が頻繁には用いられなかった可能性があるのではないかと筆者は考えている (Dobrotvorskij 1875 に「日本語表現」として「アイヌ語」の数詞が記録されていることもこれを示唆する)。

28) なお、パチェラーは他の樺太方言語彙とともに、tanku に関する記述を、Pitsudski (1912) から自らの辞典の第三版以降に取り込んでいる (Batchelor 1926: 465)。パチェラーによる Pitsudski (1912) からの転載に関しては阪口 (2020) 参照。

29) 阪口 (2021 : 81) がすでに指摘しているように、アイヌ語が事実を反映した訳と一致していない。

- (5) ホホネ、 ワン、 タンク、 レ、 クンクツ、 ワン、 タンク、 パハノ、 アン、 イコロ、
 hohne wantanku, re kunkutu wantanku pahno an ikoro
 20 倍の 千 3 倍の 十 千 くらい ある お金
 「二万円にも三万円にも達する金」(『物語』35)
 (lit. 「二万円か三万円ほどのお金」)

ライチシカ方言では「万」について「言わない(これ以上数えない)」(服部編 1964:265)と報告されているが、『物語』では「二万」が hohne wantanku、「三万」が re kunkutu wantanku と表現されている(例5)。「二万」を表すのに、係数の hohne「20 倍の」が用いられていることが特徴的である(wantanku は 5.3 で述べたように、全体として「千」を意味し、1,000 以上の数の基底数として用いられる)。

『物語』では十進法が基本となっている。hoh「20」及び hohne「20 倍の」を用いた表現は 6 例確認されるが、wanpe e-tu-hoh「30(10 が 40 に向かう)」のような hoh を基底数とした上位起算加法を用いた数(金田一 1913 が「アイヌ固有の数詞法」とするものは 1 例もない³⁰⁾。1950 年代の調査記録である服部編(1964:262)にも、「20」を表す語彙として tu kunkutu のほかに、hohne(年寄言葉)が記載されていることからして、二十進法が生産的に用いられなくなっても、hoh が 20 から 40 の間の数の基底数として用いられること(その場合、中間数は下位起算法で表される)、係数として hohne「20 倍の」が用いられることはあったようである³¹⁾。

10,000 の倍数を表す表現に、次のようなものがあるが、いずれも 10,000 を表す基底数是用いられていない(この基底数の記録がないという点は服部編 1964:265 の記述と一致する)。

- (6) レ、 バイヤ、 ウコタンケ、 ワンタンク、 ランケ、 レ クンクツ、 イコロ、 ネー
 re bayya ukotamke, wantanku ranke re kunkutu ikoro nee.
 3 倍の 番屋 合わせ 千 ずつ(?) 3 倍の 十 お金 である
 「三箇所合計三万円に上る」(『物語』35)
 (lit. 「三つの番屋を合わせて、千がそれぞれ三十のお金である(?)」)
- (7) ワン、 タンク、 ワンベ、 ヘ ネ、 イコロ
 wantanku wanpe he ne ikoro
 千(が) 10 か(?) である お金
 「一万円からの金額」(『物語』35)
 (lit. 「千が 10 個かであるお金(?)」)

以上の例から、wanpe「10」、kunkutu「十」、tanku「百」、wantanku「千」(、hoh「20」という限られた数の基底数に係数を組み合わせて、10,000 以上の比較的大きな数を表していることが分かる。基底数 wantanku に係数 hohne を用いる方式(例5)で、千の上の位である万を数えることができる。通常、任意の基底数の 10 倍は次の基底数となるが、次の基底数がない場合には、基本数以上の係数が用いられるようである。

30) 註 21 参照。

31) 日本語で 30 歳、40 歳は san-juu, yon-juu (shi-juu) を含む漢語式の言い方が多く用いられるのに対し、20 歳は、漢語式の ni-juu を含む表現のほかに、hatachi も多く用いられることを想起すれば理解しやすい。

後述するように、例5の *re kunkutu wantanku* や例7の *wantanku wanpe* ような「数名詞(句) × 数名詞(句)」は、限られた基底数を用いて、より大きな数を表す乗法として用いられることが確認できる(第6節参照)。

5.5 kunkutu、tanku に端数が生じる場合

kunkutu の場合

金田一(1913:17)は、*kunkutu*、*tanku* を用いる方法を「全く支那語流の簡便法」だとしているが、実際には、*wanpe* を基底数とする11~19(第4節参照)のように *ikasma* を用いた表現が確認される。山邊(1913)本文では、端数の表示には幾通りかがあり、基底数を *kunkutu*、係数(=連体数詞)をC(ただし基本数Dに限る)、数名詞1~9をD(数の表示される名詞が後ろにある場合はCとなる)とすると、金田一(1913:17)の言う「全く支那語流の簡便法」であるC *kunkutu* D型(例8、9)と、D *ikasma* C *kunkutu* 型(例10)、C *kunkutu* *ikasma* D型(例11)の3つのタイプに分けられる。

- (8) *ヅ*、*クンクト*、*アシシネ*、*アイヌ*
tu kunkuto asisne aynu
 2倍の 十 5倍の 人
 「二十五人」(『物語』114)
- (9) *メイヂ*、*ヅ* *クンクヅ*、*イワン* *パー*
Meiji tu kunkutu iwan paa
 明治 2倍の 十 6倍の 年
 「明治二十六年」(『物語』53)
- (10) *シネピサン*、*トー*、*イカシマ*、*ヅ* *クンクト*、*トーホ*
sinepisan too ikasma tu kunkuto tooho
 9倍の 日 余る 2倍の 十 日(長形)
 「二十有九日の日に」(『物語』182)
- (11) *ヅ* *クンクヅ*、*イカシマ*、*アシシネ*、*アイヌ* (比較: 例8)
tu kunkutu ikasma asisne aynu
 2倍の 十 余る 5倍の 人
 「二十五人」(『物語』18)

なお、ライチッカ方言において、21は *sineh ikasma tu kunkutu* (村崎1979:88)とも *tu kunkutu sineh* (服部編1964:262)ともされ、やはり、*kunkutu* を基底数として用いる数には同じ話者でも揺れがあり、単純に漢数字と同じ語順とすることはできない。おそらく、D *ikasma* C *kunkutu* という言い方は *wanpe* を基底数とした11~19(これは十進法である)を応用したものであり(*wanpe* の位置に *kunkutu* をあてはめる)、漢数字と同じ語順のものは、語彙だけでなく仕組みもまた借用されたものと思われる。*ikasma* を用いることがあるのは、第6節で述べるような、数名詞に相当する要素の連続を避けた可能性も考えられる。

11~19の場合と異なり、基底数 *kunkutu* を含む数は、*kunkutu* が数名詞であるためか、数が指定される名詞的要素が後置されないことがある³²⁾。*kunkutu* を基底数とする数のうち、*ikasma* を用い

るものは加法と考えられ、ikasma の前後を入れ替えても表される数には変化がない（例1、2、10にあるように、wanpe を基底数とする11~19と同様に、基本数1~9がikasmaに前置されるのが一般的かと思われる）。wanpe を基底数とする11~19の場合には、こうした前後の入れ替えは見られず、固定されている。

tanku の場合

100以上の数で100 (sine tanku「1倍の・百」) を基準に端数が生じる場合、ライチシカ方言では、sine tanku orowa wanpe (ikasma)「110 (1倍の・百・そこから・10・(余る))」、sine tanku orowa tu kunkutu ikasma「120 (1倍の・百・そこから・2倍の・十・余る)」となる。120以上で、十の位に端数が生じない場合には末尾に ikasma を付けるようである（つまり、wanpe が末尾にある場合に ikasma が付かない）。111、112の場合には、sine tanku orowa sineh ikasma wanpe「1倍の・百・そこから・1・余る・10」、sine tanku orowa tuh ikasma wanpe「1倍の・百・そこから・2・余る・10」となる（以上、服部編1964:264）。Peng & Brainerd (1970:395) は、orowa に焦点を当てた場合、左の値 (= sine tanku) が orowa の右の値 (= wanpe, tu kunkutu) よりも常に大きくなる降順を取るのに対し、その右側の ikasma を含んだ十の位以下のかたまりでは、その左側の値 (= sineh, tuh) が右側の値 (= wanpe) より小さい昇順となると指摘している。wanpe を基底数として ikasma で端数 (= 基本数 D) を表示する場合、固定的に $D \text{ ikasma } B^1$ ($B^1 = \text{wanpe}$) となることは前述した通りで、この構造を崩せないため、100 を基準に10~19の端数が生じる場合、降順に配置できず、順序が変わる部分に区切りとして orowa を用いているのではないかと考えられる（21以上で、語順が揺れることは前述した）。

なお、金田一(1913)には、こうした orowa「そこから」を用いた形式や、末尾に ikasma を付加して端数を表示する形式は見られず³³⁾、『物語』にも確認できない。tanku を基準に tu kunkutu「20」という端数が生じる例はあり（例12、13）、日本語の漢数字と同じく順次に表現されているものと、wanpe を基底数とする数と同じく端数を前置するものがある。

- (12) シネ、 タンク、 ツ、 クンクツ、 イコロ
 sine tanku tu kunkutu ikoro
 1倍の 百 2倍の 十 お金
 「百二十円」(『物語』35)

32) 11個という場合に sine-p(～h) ikasma wan-pe、11匹の犬という場合には sine-seta ikasma wan-seta もしくは sine-p(～h) ikasma wan-seta というように、名詞化する形式(-の後の要素)を数連体詞に後置する必要があるが（つまり、数連体詞+名詞的要素+ikasma+数連体詞+名詞的要素の形である必要がある）、kunkutu などの数名詞の場合には、例11~14のような例や re hoynu ikasma re kunkutu「33匹のクロテン」(Dobrotvorskij 1875:338) のような例が見られる。

33) Lafer (1917:195) には ikasma を末尾に置く tuu kunkutu sine ikasima「21」が確認できる。『物語』でも ikasma を末尾に置いた例はあるが、日本語の「～あまり」と同様に、その数よりも少し多いことを表す。レ、タンク、イカシマ、アイヌ re tanku ikasma aynu「三百余人」(『物語』42) やシネ、タンク、イコロ、イカシマ「百円以上」 sine tanku ikoro ikasma (『物語』71) という例がある（訳は原典による）。

- (13) ズペサン、 タンク、 アシシネ、 クンクト、 アイヌ
 tupesan tanku asisne kunkuto aynu
 9 倍の 百 5 倍の 十 アイヌ
 「八百五十人」(『物語』2)
- (14) レ、 タンク、 イカシマ、 ワン、 タンク、 コク
 re tanku ikasma wantanku koku
 3 倍の 百 余る 千 石
 「千三百石」(『物語』35)

小括

wanpe を基底数とする 11~19 は、端数 (=基本数 D) が ikasma に前置する (第4節)。kunkutu、tanku、wantanku を基底数とする数の場合、漢数字と同じ語順のものもあるが、11~19 と同様に ikasma を用いて、端数を表示することもある。特に、kunkutu を基底数を用いる数の表現には、同じ話者でも揺れがあり、単純に漢数字と同じ構造とすることはできない。ライチシカ方言の記述 (服部編 1964; 村崎 1979) が『物語』と同様に、kunkutu を基底数とする数の構造に揺れを持つことも注目に値する。おそらく、 $D ikasma C kunkutu$ (D、C とも 1~9) という言い方は、20 以上の数を表すのに十進法を取り入れる以前から存在する 11~19 (これは wanpe を基底数とした十進法) の仕組みを応用して 20 以上も表せるようにしたものであり、日本語の漢数字と同じ語順のものは、語彙だけでなく仕組みもまた借用されたものであると思われる (その中間のものとして例 11 のようなものがあるのかもしれない)。

6. 『アイヌ語ロシア語辞典』(Dobrotvorskij 1875) の記述

以下では『アイヌ語ロシア語辞典』(Dobrotvorskij 1875) を用いて、20 より大きな数がいかに表現されるかについて述べていくことにする。ここで取り上げる形式は、『藻汐草』(上原 1972/1792)、ダヴィドフの「サハリン半島南端に住む民族の言語の語彙集」(Davydov 1812) をはじめとする他の文献資料から採られたものではなく、ドブロトヴォルスキー自身が採集したものに限定する (表記は服部編 1964 に準じた)。ここまでの節で 1~9 に関しては、複数地点の形式が確認でき、音節末子音以外には大きな違いは見いだせない。10~19 も、どの年代、地域でも同じ構造である。以下では『アイヌ語ロシア語辞典』(以下、『辞典』) をもとに、20 より大きい数について検討する。音節末の h の有無で数名詞か数連体詞かが変わる場合にのみ [] で補って示し、母音が脱落している sne (~sin')、in' は全て sine、ine と表記した。語中の h が脱落している場合があるが、脱落していない例もある場合は h を () で括った)。表 4 は 10~200 までの数名詞 (句) をまとめたものである。

表4. アイヌ語樺太方言の数名詞10~200 (『辞典』より、()内は出現頁)

10	wanpe (46)	110	wanpe eiwan(h)o (44)
20	sine hoh (294, 305)	120	iwan(h)o(h) (73)
30	wanpe etuho (44)	130	wanpe earuwan(h)o (44)
40	tu hoh (334)	140	aruwan(h)o (24)
50	wanpe ereho (44)	150	wanpe etupesano(h)o (44)
60	re hoh (338)	160	tupesano (350)
70	wanpe eineho (44)	170	wanpe esinepisan(h)o (44)
80	ine hoh (87)	180	sinepisano (294)
90	wanpe easisnehoh (44)	190	wanpe esinewano (44)
100	asisne ho (26)	200	sinewano(h)o (45, 294, 305)

ここで用いられている10~100は、金田一(1913:16)が「アイヌ固有の数詞法」として提示するものとほとんど一致する。二十進法であり、30、50…190は接頭辞eを用いた上位起算加法で表される³⁴⁾。

6.1 基底数 hoh「20」、(sine)wano「200」、way(sine)wano「2000」

20以上の数において、hoh「20」が基底数であるが(表4参照)、この基底数は200未満のブロックにおいてのみ用いられる(100は「5つの20」、120は「6つの20」などと解釈される)。20以上200未満は確かに二十進法ではあるが、アイヌ語では係数に当たるものが、数連体詞であり、それが表しうるのは基本数倍であるため、二十進法と言っても、400ごとではなく、200で基底数が切り替わり、その後も10倍ごとに基底数が切り替わる。

20~199において、ラウンドナンバーではない10の倍数を、分析可能な形式と捉えず、20の倍数と同様、30、50…190を表す特有の形式と認定してしまえば、10以上の数は全て下位起算法と解釈することができる。こう解釈すると、20以上200未満の数は、10の倍数に、基本数1~9を ikasma で前置するだけで済む。後には Naert (1961:350)に見られた wanpe ikasma sine hoh「30」や、金田一(1913:16)に見られる wan[pe] ikasma asisne hoh「110」のように、二十進法のラウンドナンバーではない10の倍数も、ikasma「余る」を用いた下位起算法で表す方式に貫徹されていたのかもしれない³⁵⁾。

200から2,000の間の数においては、基底数は200ごとに進む(表5)。200そのものは(sine)wano (<(sine-)wan-hoh)「200((1倍の・)10の・20)」でhohを基底数としていると言えるが、それより大きい数は、そのsinewano「200」が基底数となっている(表3ではどの記録でも基底数

34) なお、二十進法(20以上200未満)の中間数のうち、後半の数は、落合(2021)が指摘するように、31であれば「11が40へ向かう」というように上位起算加法で解釈することができる。ただ、共時的には、そうした分析意識なしに「1・余る・30」と認識されているのではないかと筆者は推測する(二十進法における wanpeetuhot(〜h)「30」、wanpeerehot(〜h)「50」という形式は、もはや分析可能な形式とは考えられないのではないか)。sine[h] ikasma wanpeetuhot「31」(『辞典』305)も「1・余る・30」と認識されている可能性がある。

35) 金田一(1935:263)には、樺太アイヌから聞いたものとして、30、50、70、90といった20の倍数ではない10の倍数が下位起算法で表された例が掲載されている。なお、金田一(1913:16)において、120は hoh ikasma asisne hoh「20・余る・5倍の・20」、130は hoh ikasma asisne hoh とされ、asisne hoh「100(5倍の・20)」が基底数のように扱われているが、詳細は不明である。

tanku「百」が用いられている)。

表5. アイヌ語樺太方言の数名詞 200~1,000 (『辞典』より、() 内は出現頁)

ラウンドナンバー		ラウンドナンバーではない 100 の倍数	
200	sinewan(h)o (45, 294, 305)	300	asisneho ikasma sinewano (26)
400	tu sinewano (334), tuwano (45)	500	asisneho ikasma tusinewano (26)
600	re sinewano (338)	700	asisneho ikasma resinewano (26)
800	ine wanhoh (87)	900	asisneho ikasma inesinewano (26)
1,000	asisne sinewano (26)	1,100	記載なし

200 の倍数の中間数は、ラウンドナンバーを基準に、ikasma「余る」を用いて表される (表6、ikasma を太字にし、その前後をひとかたまりで記述する)。hoh「20」を基底数としたブロックである ikasma の前部は二十進法であり、100 の倍数が基準とはなっていない。そのため、310、320 のような数は、300 に 10、20 を足すのではなく、200 に 110、120 を加える方式である (表6)。

表6. アイヌ語樺太方言の数名詞 200~400 (『辞典』より、() 内は出現頁)

200 台		300 台	
200	sinewano (45)	300	asisneho ikasma sinewano (26)
210	wanpe ikasma sinewano (305)	310	wanpeeiwano ikasma sinewano (44)
220	sinehoh ikasma sinewano (305)	320	iwanho ikasma sinewano (73)
230	wanpeetuhoh ikasma sinewano (44)	330	wanpeearuwano ikasma sinewano (44)
240	以下、300 まで記載なし	340	以下、400 まで記載なし
		400	tu sinewano (334)

ここで重要なのは、sinewano を基底数とした場合、中間数が、ikasma「余る」を用いた下位起算法で表示されていることである。wanpeetu(h)のように、hoh を基底数としたブロック (ikasma の前部) は、上位起算法によるものと考えられるが、前述のように、語形成を意識せず、wanpeetu(h) = 30、wanpeeiwano(h) = 110 のように認識してしまえば、下位起算法と捉えることが可能である。なお、sinewano「200」より下の基底数のブロックは、それぞれに ikasma を用いて、sine[h] **ikasma** sinehoh **ikasma** sinewano「221 (1つ・余る・20・余る・200)」(305) のように表示する。

その後の大きな数においては、sinewano「200」の10倍である way(sine)wan(h)o「2,000 (10の・200)」(以下、語形は waysinewano で代表させる) が基底数となっていく (n は s の前で規則的に y となる)。

表7. アイヌ語樺太方言の数名詞 2,000~3,800 (『辞典』より、() 内は出現頁)

2,000	waysinewano (43)	3,000	asisnesinewano ikasma waysinewano (43)
2,200	sinewano ikasma waysinewano (43)	3,200	iwaysinewano ikasma waysinewano (43)
2,400	tusinewano ikasma waysinewano (43)	3,400	aruwaysinewano ikasma waysinewano (43)
2,600	resinewano ikasma waysinewano (43)	3,600	tupesaysinewano ikasma waysinewano (43)
2,800	inesinewano ikasma waysinewano (43)	3,800	sinepisaysinewano ikasma waysinewano (43)

なお、表7に見るように、2,200 から 3,800 まで 200 ごとの数 (sinewano を基底数としたブロック) は、ikasma の前の sinewano「200」(waysinewano の一つ下の基底数) にアイヌ語固有の数連

体詞 sine「1倍の」～sinepisan「9倍の」が係数(C)として前接する。例外もあり、wanpe waywanho「20,000(10×2,000)」(43)という例もある。これは、通常であれば、基底数が切り替わる位置である。

6.2 20,000以上の数

20,000を表す表現として、wanpe waywanho「10×2,000」(43)という例があるが、これは5.4で見た例7と同じ構造を持ち、数名詞(句)が二つ連続したもの、つまり乗法と考えられる。30,000も、[asisneho ikasma wanpe] waysinewano「(15×2,000)」(25)という数名詞句が連続するタイプとなっている(asisnehoとwanpeはikasmaで接続されて一つの数名詞句となっていると解釈する)。こうした例外が生じるのは、十進法において10,000を表す基底数がなかったのと同様に、この体系において20,000を表す基底数がないからだと考えられる。20,000以上の数表現としては、依然として、way(sine)wano「2,000」にsinehohne「20倍の」、tuhohne「40倍の」を係数として用いてsinehohne waysinewano「40,000」(305)、tuhohne waywanho「80,000」(334)と表わすものがある³⁶⁾。これまで基底数が十倍ごとに切り替わっていたのに対し、これらの例では係数は、基本数1～9より大きくなっているのに基底数は切り替わっていない。こうした基本数より大きい係数は、基底数が切り替わらない場合の例外的な措置である可能性が高い。

数名詞(句)連続タイプの乗法は、20,000の倍数であるasisnehoh waywanho「200,000(100×2,000)」(26)、sinewano waywanho「400,000(200×2,000)」(305)、waysinewano waywanho「4,000,000(2,000×2,000)」(305)にも用いられる。これは係数(=数連体詞)で対応ができなくなるためであろう。数連体詞hohne「20倍の」ではなく、sinewano「200」やwaywanho「2,000」のような数名詞を連続させることで400,000および4,000,000という数を表現している。このタイプの表現は、数連体詞を用いてより大きな数を表す数名詞句を作る表現と異なり、乗法と考えられる(数連体詞では、可能だとしても、hohneの1～9(=基本数)倍までしか表せないと思われる)。

1,000,000はasisneho ikasma tusinewano waywanho(344)と表わされるが、これも数名詞(句)連続タイプであることに注意が必要である。tusinewano「400」はsinewano「200」を基底数とする数名詞だが、これは後続する名詞を修飾しない形式であり、ここで数表現に切れ目が生じている。この例は[asisneho ikasma tusinewano] waywanhoと解釈されるべきもので、「[500(100・余る・400)]×2,000」という乗法と考えることができる。

以上のように、数名詞句と、数名詞(句)の連続とを区別することは、表している数を認識するうえで重要である。基底数はwaysinewano「2,000」までしか確認できず、それ以上の数を表すには、基底数way(sine)wanoを持つ数にさらに係数(数連体詞)を付加するか、数名詞を並べる(=掛ける)必要がある。waysinewano「2,000」より大きい基底数の存在は確認できないが、20,000以上の数は、乗法によって、かなり自由に数を数えられることは確かだろう(上で取り上げたように4,000,000まで記録されている)³⁷⁾。

こうした数名詞(句)を連続させる方法(乗法)は、例7のほか、金田一(1913)にも確認でき

36) hohne以下の数名詞句全体にsine「1倍の」、tu「2倍の」という意味を付与している可能性もある。

37) なお、魚井・廣田(2004:18)は「八千万まで推定可能」としているが、数連体詞(=係数)を用いる数名詞句タイプと、数名詞(句)連続タイプを区別せず同様の数式に置き換えて計算している。そのため、この推定は当たらないのではないかと思われる。例えば、本節で提示したtuhohne waywanho「80,000」(334)という数名詞句を二つ並べるだけでも、6,400,000,000が表現できる可能性がある。

る。実例を記述したものか、「規則的に」金田一が作り出したものかは定かでないものの、hoh tanku「二千」(金田一 1913:17)のような数名詞を連続させる表現が見られる(数連体詞を用いた、全体として数名詞句になる表現の場合、hohne tanku が期待される)。また、sine ikasma hoh tanku「二千百」、tu ikasma hoh tanku「二千二百」というような例も掲載されている³⁸⁾。これらの例に出てくる hoh を hohne と同じものと考えてしまうと、sine[h] ikasma hoh tanku、tu[h] ikasma hoh tanku はそれぞれ「*2,001 (1・余る・20倍の・百)」、「*2,002 (2・余る・20倍の・百)」と解釈される可能性がある³⁹⁾。係数(数連体詞)を用いるならば、「二千百」は sine tanku ikasma hohne tanku、「二千二百」としては tu tanku ikasma hohne tanku が期待される(下線部は金田一の記述にない)。後続する名詞を修飾しない hoh の後で切れ目が生じているため、それぞれ[sine ikasma hoh] tanku「2,100 (21の [= 1・余る・20倍の]・百)」、[tu ikasma hoh] tanku「2,200 (22の [= 2・余る・20倍の]・百)」と解釈されるのだろう⁴⁰⁾。

小括

『辞典』では、hoh「20」といった二十進法の基底数のほか、sinewano「200」、waysinewano「2,000」といった基底数が確認される(いずれの基底数も ho(h)「20」を基礎としている)。20から199は二十進法であるが、それ以上になると、基底数が20、200、2000と10倍ごとに変わる(通常二十進法で想定される400と8000が基底数とならないのが特徴的である)。それ以上の数は、基底数と係数、端数を組み合わせて数名詞句を作ったり、数名詞句を連続させる乗法を用いることで表現可能である。村崎(2009:77)は「一般的に言って20進法よりも10進法の方が多数を数えるのに容易という傾向が認められる」とするが、少なくとも『辞典』においては、当てはまるとまでは言えない。

終わりに

本稿では、19世紀後半から20世紀半ばにかけて記録された資料を用いて、アイヌ語樺太方言の数詞に関して考察した。wanpeを基底数とした11~19は非常に共通性が高く、本稿で用いたどの資料でも仕組みが一つに固定されている。20以上の数になると、kunkutu「十」、tanku「百」、wantanku「千」という十進法の基底数が使用される。『辞典』では、さらに二十進法に基づく数が数多く確認でき、hoh「20」といった二十進法の基底数のほか、sinewano「200」、waysinewano「2,000」といった基底数が確認される。本稿で用いたどの資料でも10,000もしくは20,000を表す基底数は確認できないが、それ以上の数は、基底数と係数、足す数を組み合わせることで表現可能である。例えば、『辞典』では、20,000以上の数も、way(sine)wano「2,000」を含む数名詞(句)に係数である数連体詞を付加して、より大きな数を表す数名詞句を作るか、数名詞(句)を並べることにより表現している(『物語』にも連体数詞を用いた hohne wantanku「二万」、数名詞を並べた計算式である re kunkutu wantanku「三万」という例がある)。

38) 村崎(2009:75)は、金田一(1913:17)に関して触れた部分で、「例えば、2001円は sineh ikashma hohtanku」(表記ママ)と記述している。しかし、前述のように、金田一(1913:17)は sine ikasma hoh tanku を「二千百」としており、表される数が一致していない。

39) ただ、sine ikasma hoh が本当に sineh ikasma hoh を意図したものかは分からない。sineh ikasma hohne tanku であれば2,001を表すと思われるが、金田一が「二千一」としていない点が気になる(註38参照)。

40) ただし、2,100は sineh ikasma hoh tanku、2,200は tuh ikasma hoh tanku(下線は筆者による)の方がより正確ではないかと思われる。

樺太方言に関しては、数詞に関する記述が質量ともに文献により大きく異なっている。そのため、年代差、地域差については分からないことも多い。本稿で分析対象とした資料のうち、特に『辞典』に現れる数表現は、これまで樺太方言について知られていたことと異なる部分がある。しかし、『辞典』に確認できる二十進法に基づく数表現が他の年代、地域でも確認できるのかは明らかではない。ただ、樺太方言の数詞に関する分析から、一部の資料のみを取り上げて樺太方言の特徴を論じることが必ずしも適当ではないことは示されたと思う。今後、さらに新しい資料を加えて、樺太方言の分析を進める必要があるだろう。

参考文献

- 浅井亨 (1982) 「アイヌ語における数」『富山大学人文学部紀要 (1981)』5 : 63-92.
- 東俊佑 (2010) 「幕末のサンタン交易について」北海道開拓記念館編『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告—』1-32. 札幌 : 北海道開拓記念館.
- Batchelor, John (1926) *An Ainu-English-Japanese dictionary*, third edition. Tokyo: Kyobunkan.
- 知里真志保 (1941) 「アイヌ語の連体詞」『言語研究』7-8 : 112-146.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『樺太庁博物館報告』4 (4) : 51-172.
- Davydov, Gavrila Ivanovich (1812) *Slovar' narechij narodov obitajushchikh na juzhnoj okonechnosti poluostrova Sakhalina*. In: I. F. Kruzenshtern. *Puteshestvie vokrug sveta v 1803, 4, 5 i 1806 godakh na korabljakh Nadezhde i Neve* 3: 342-380. SPb.
- Dobrotvorskij, M. M. (1875) *Ainsko-Russkij Slovar'*. Kazan.
- ドロトウヴォールスキー, M. M. (1995) 「アイヌ語・ロシア語辞典(2)」(寺田吉孝訳)『北海学園大学学園論集』85 : 51-65.
- ドロトウヴォールスキー, M. M. (2016) 「M. M.ドロトウヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(20)」(寺田吉孝・安田 節彦訳)『北海学園大学学園論集』170 : 61-157.
- 服部四郎 (1957) 「アイヌ語における年長者層特殊語」『民族学研究』21 (3) : 158-165.
- 服部四郎 (1961) 「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」『言語研究』39 : 1-20.
- 服部四郎編 (1964) 『アイヌ語方言辞典』東京 : 岩波書店.
- 服部四郎 (1976) 「はしがき—アイヌ語におけるカラフト方言の位置とその最後の話し手藤山ハルさん—」村崎恭子『カラフトアイヌ語』 : I-XV. 東京 : 国書刊行会.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学」『民族学研究』24 (4) : 307-342.
- 池上二良 (1990/2004) 「日本語・北の言語間の単語借用」『北海道方言研究会会報』30 : 2-12. (池上二良『北方言語叢考』272-285. 札幌 : 北海道大学図書刊行会 所収.)
- 萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』東京 : 三省堂.
- 金田一京助 (1913) 「樺太アイヌ語大要」山邊安之助 (金田一京助編) (1913) 所収.
- 金田一京助 (1935) 「数詞から見たアイヌ民族」東京人類学会編『日本民族』 : 257-298. 東京 : 岩波書店.
- 甲地利恵 (2001) 「小泉文夫記念資料室所蔵のアイヌ音楽録音資料」柘植元一編『民族音楽アーカイヴズにおけるマルチメディア・データベースに関する研究—音響を主体とするメディア統合をめざして— (科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2)) 研究成果報告書, 平成9年度~平成12年度)』 : 45-90. 東京 : 東京芸術大学音楽学部.
- Langsdorff, Georg Heinrich von (1812) *Sprachproben derjenigen Völker, welche die nördliche*

- Küste von Jesso, die Insel Tschoka, die kurilischen Inseln bis zum südlichen Theil von Kamtschatka bewohnen, und sich Ainu nennen. In: *Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807* 1: 300-303. Frankfurt am Mayn: Wilmans.
- ラペルーズ (1988) 『ラペルーズ世界周航記—日本近海編— (Voyage autour du monde de Lapérouse)』(小林忠雄編訳) 東京: 白水社.
- Latyshev, V. M. (1991) Ajnski slovar' N. V. Rudanovskogo. *Kraevedcheskij bjulleten'* 1991 g. No. 4: 108-123.
- Laufer, Berthold (1899) The Jesup North Pacific Expedition. Ethnological Work on the island of Saghalin. *Science*, New Series, Vol. 9, No. 230: 732-734.
- Laufer, Berthold (1917) The vigesimal and decimal systems in the Ainu numerals: With some remarks on Ainu phonology. *Journal of the American Oriental Society* 37: 192-208.
- Menninger, Karl (1969) *Number Words and Number Symbols*. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press.
- 村崎恭子 (1976) 『カラフトアイヌ語』 東京: 国書刊行会.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語 文法編』 東京: 国書刊行会
- 村崎恭子 (2008) 「千島アイヌ語の数詞について」村山七郎先生生誕百年記念シンポジウム論文集編集委員会編『日本語の探究—限りなきことばの知恵—村山七郎先生 (1908-1995) 生誕百年記念論文集』 179-192. 京都: 北斗書房.
- 村崎恭子 (2009) 「樺太アイヌ語の数詞について」津曲敏郎編『サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 71-84. 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- 村山七郎 (1970/1971) 「Dyowski のシュムシュ島アイヌ語資料について」『北千島アイヌ語—文献学的研究—』: 134-244. 東京: 吉川弘文館.
- Naert, Pierre (1961) La vocabulaire aïnou de la Pérouse collationné sur le vif. *Orbis* X no.2: 320-55.
- 中川裕 (1988) 「アイヌ語と接触した外国人—世界最初のアイヌ語記録者アンジェリス—」『国文学解釈と鑑賞』 53 (1): 162-167.
- 落合いずみ (2021) 「アイヌ語の数詞再考: 二十進法における下方算法から上方算法への切り替え」『北方言語研究』 11: 99-121.
- Ohnuki-Tierney, Emiko (1968) A Northwest Coast Sakhalin Ainu World View. (Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Wisconsin, Madison).
- 小野米一 (1997) 「アイヌ語と日本語」平山輝男ほか編, 小野米一ほか執筆『北海道のことば (日本のことばシリーズ 1)』 220-223. 東京: 明治書院.
- 鬼春人 (1959) 「アイヌ語と日本語における流音に就いての一考察」『日本人類学会日本民族学協会連合大会記事』 第 13 回: 63-66.
- Peng, Fred C. C. & Brainerd, Barron (1970) A Grammar of Ainu Number Names. *Lingua* 25: 381-397.
- Pfizmaier, August (1850) Bemerkungen uber die von La Perouse gelieferte Wotersammlung der Sprache von Saghalien. *Kaiserliche Akademie der Wissenschaften zu Wien, Sitzungsberichte der philosophisch-historischen Klasse* 3: 150-170.
- Piłsudski, Bronisław (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.
- 阪口諒 (2020) 「ジョン・バチェラーの著作に含まれる樺太アイヌの口承文芸: ピウスツキ資料からの転載の実態」『口承文藝研究』 43: 15-30.

- 阪口諒 (2021) 「アイヌ語資料としての『あいぬ物語』」山辺安之助 (2021) 『あいぬ物語』(金田一京助編) 61-91. 東京: 青土社.
- 更科源蔵 (1963) 『アイヌ民話集』札幌: 北書房.
- Schrenck, Leopold von (1881) *Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-1856* Bd.3: Die Völker des Amurlandes. St. Petersburg. [https://doi.org/10.5962/bhl.title.15761]
- Shrenk Leopold Ivanovich (1883) *Ob inorodtsakh Amurskogo kraja* Tom 1. SPb.
- Siebold, Philipp Franz Balthazar (1858) *Aardrijks- en volkenkundige toelichtingen tot de ontdekkingen van Maerten Gerritsz. Vries, met het fluitschip Castricum A° 1643*. Amsterdam.
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』6-94. 東京: 三省堂.
- 津曲敏郎 (2009) 「サハリンの言語世界: 単語借用から見る」『サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』1-10. 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- 上原熊次郎(熊治郎)原著 (1792/1969) 『蝦夷方言藻汐草』(金田一京助解説) 弘南堂書店.
- 魚井一由・廣田徹 (2004) 「アイヌ語数詞体系に対する考察—ドプロトゥヴォールスキーのアイヌ語辞典を基盤にして—」『旭川市博物館研究報告』10: 1-19.
- 山邊安之助 (1913) 『あいぬ物語 附あいぬ語大意及語彙』(金田一京助編) 東京: 博文館.
- 山本多助 (1981) 『アイヌ語小辞典 (第二版)』足寄町: 松崎稔.
- 八杉佳穂 (1990) 「中米諸語の数体系」『国立民族学博物館研究報告 (1989)』14(3): 519-670.
- Yasugi, Yoshiho (1995) Numeral Systems. *Senri Ethnological Studies* 39: 77-105.

Numerals and methods of calculation of the Sakhalin Ainu

Ryo SAKAGUCHI

(Chiba University / JSPS research fellow)

The purpose of this paper is to clarify the numeral system in Sakhalin Ainu recorded from the late 19th to the mid-20th century. In the Ainu language, fundamental methods of counting are decimal and vigesimal. The decimal system is used for numbers below 20, and the vigesimal system for numbers from 20 and above. From previous studies, it is known that the decimal system is widely used in Sakhalin Ainu. I investigated numerals in Dobrotvorskij (1875), Yamabe (1913), Laufer (1917), Naert (1961), and Hattori (ed.) (1964), whose descriptions are recognized as accurate.

From the investigation of the above materials, the following was found. (1) From 11 to 19, the construction was fixed to D + B (D: digit; B: base number). (2) Although the base numbers in the decimal system such as *kunkutu* "ten", *tanku* "hundred", and *wantanku* "thousand" are confirmed in most of the records, the base numbers such as *hoh* "20", *(sine)wano* "200", and *way(sine)wano* "2,000" were productively used only in Dobrotvorskij (1875). (3) There are two methods for expressing numbers larger than 10,000 and 20,000: (a) nominal numeral phrase type and (b) the nominal numeral (phrase) continuous type (= multiplication).